第３回鶴岡市総合計画審議会　企画専門委員会　会議概要

○　日　　時　　令和5年6月27日（火）　午後3時30分から午後5時15分まで
○　場　　所　　鶴岡市役所別棟2号館　22・23号会議室
○　出 席 者　　別紙委員名簿のとおり（委員14名中11名出席）
　　出席委員　浅野憲周委員、市川至音委員、鎌田剛委員、クランプアレクシス委員、菅原剛委員、清野康子委員、瀬尾利加子委員長、平智委員、高谷時彦委員、森木三穂委員、大和匡輔委員
　　欠席委員　安達忠士委員、鈴木淳士委員、屋代高志委員
○　傍 聴 者　　なし
○　協議題等　　(1)分野横断的な課題に関する論点と主な施策（案）について
　　→委員からの主な意見は以下のとおり
　　(2)デジタル田園都市国家構想総合戦略の策定について
　　→委員からの主な意見は以下のとおり

(1) 分野横断的な課題に関する論点と主な施策（案）について

論点１．若者の地元回帰の促進について

・キャリア教育もしっかりしていかないと「鶴岡は何もない」ということになってしまう。大人の意識が変わらない限りは、やはり子どもにそれが伝わってしまうと思うので、中学生までではなく高校生も変えていかなければいけないと思う。
・つるおかエールの支援を受け、鶴岡に戻ってきた人数を聞いた時に少ないと思った。せっかく支援しているので、もう少し戻ってくるように働きかけることとかできないのかと思う。
・高校生などが一旦鶴岡から出た後、戻ってきたいと思った時に、安心して戻って来られる仕組みづくりが必要。
・田園や自然だけが協調されすぎているのではないかと若干気になる。鶴岡らしいまちの暮らしの質をもっと共有できれば、ここにずっと住んでいたいとか戻ってきたいという気持ちになると思う。
・空き地があることや、人口減少が進んでいくことを前提にして、どういう魅力を出していけるかが重要。空き家や閉まっているお店があることを前提にして、それをどういう価値に変えていくのかという視点からの議論も加わると良い。
・人口減少社会をどうやってデザインしていくかが急務である。
・大学に行って高い知識や教養を身につけて戻ってきてもらうことが一番理想と思う。なぜ出ていった人が戻ってこないのか、何があれば戻ってくるのか、年代や性別、家庭環境となどで全然違うと思うので、そこも明らかにした上で対策をすることが必要。
・鶴岡のここを押すんだということをきちんと説明していくことが重要。東京ではできないこと、東京にはないもの、そういうことを子ども目線でもわかるようにきちんと伝えていくことが重要。
・今の子どもたちに本物という価値観がないような気がする。例えば、合成繊維ではない、本物の

シルク。我々は先人先輩たちに、これがいいものだとかいうものを教えてきてもらった。本物の価値を子どもたちにきちんと伝えていけると良い。

・何のために小中一貫校にするのか見えてこない。具体的に示してもらいたいと思う。

・若者の地元回帰の促進について、結局使命感というものも植え付けていく必要があると思う。いい仕事があるので、帰ってくる人がいるかもしれないが、自分は家を守らなければならないなどの使命感で残っている人の方が多いような気がする。

・鶴岡から出た若者が戻ってくるために、大企業の誘致や新規起業家を育てるなどもあるが、長い目で見ると、それが本当に正しいのかと感じるときがある。人口が減っていくことも想定して、若者の地元回帰に取り組んでほしい。

・子どもの価値観は親の影響を一部受けて形成されるため、変革を起こすべき対象は子どもよりも親である可能性がある。その上で、親に何も説明せずに『お子さんに「鶴岡はいいところだよ」と伝えてください』と要求するのは困難。そこで、子どもを持つ親に「鶴岡の魅力をどう伝えるか」を思考し、推進することが、遠回りのように見えて実は近道になると思う。

・地元への若者の回帰について考える際、若者たちが外の世界で経験を積むことを奨励するのが重要だと考える。彼らが鶴岡に戻らなくても、鶴岡出身で世界中に散らばっている彼ら自体が、現在世界で活躍している「華僑」のような資産となり得る。そのような人々をオンラインコミュニティや関係人口として活用し、将来の移住につなげる視点からも考えるべきだろう。

論点２．誰一人取り残さないための取組の推進について

・スクールソーシャルワーカーを学校で運用中だが、教育現場の中で福祉を利用するのはまだハードルが高く浸透していない状況である。ヤングケアラーやDV、虐待などもの問題がまだまだ顕在化されてないところも改善していきたい。

・若い世代の移住・定住等に力を入れるのであれば、もう少し医療に関しても施策として、予算も含めて重要視した方が良い。医療課題に対する対策や予算が少ないように感じる。

・地域医療に関する市民アンケートの中で、不安や不満を感じているということは、とても重要な意見だと思うので、広報活動など、医療者に対する対応等も含めて、もう少し重点的に組み込んでほしい。

論点３．あらゆる分野での人手不足、担い手不足への対策について

・全ての分野において人手不足と担い手不足がある。すぐにたくさん人が来るわけではなく、人がたくさん生まれるわけではないと思うので、今いる中でどうやっているのか、あまり見えてこない。将来的なこと考えつつ、今困っている人たちもいるので、人がいない中で仕組みづくりをしていくことが必要。

・賃金や地理的な制約などでフルタイムで働くのが困難な状況があるため、パートタイムの副業やリモートワークなどを活用するのも一つの考え方。鶴岡に年間を通じて滞在するのは難しいかもしれないが、年間を通じて必要な期間だけ働くなどの働き方を提案すれば、今までより広範な人々を労働力として確保できる可能性がある。

論点４．人との交流や国際化の更なる推進について

・盛岡市がニューヨークタイムズに載った。鶴岡も良い所があるので、ニューヨークタイムズなどに発信する方がいると良い。

・観光面でのSNSの「映え」のような写真が綺麗なところに観光客は行く。鶴岡はSNSの発信が少し弱いと思う。

・鶴岡は夜がとても暗い。インバウンドを呼ぶにしても、昼見るところがあっても夜見るところがない。五重塔などをライトアップしたり、SNS映えなどに繋げていくと良い。四季を通して色々あると思う。子どもたちに体感してもらって自慢できるようになれば良い。

・食文化創造都市として、世界の創造都市ともっと交流できたら良いと思う。コロナ禍になってからオンラインのイベントが続いている。実際に他の交流都市に来てもらったり、行ったりするようなイベントをしたいが予算の関係でできない。鶴岡市民と外国人は実際に交流する機会が少ないのではないかと思う。外国人からも同じような意見があった。スポーツや料理など、一緒にできるイベントを増やしたら良いと思う。鶴岡市の食文化をメインにして、料理教室などを通して、みんなが交流できたら良いと思う。

・臼杵市も食文化創造都市になった。ユネスコ食文化創造都市ということを介した交流は、日本で二つしかないので、それを推進するというのは、とても妙案であると思う。

・日本にはユネスコの食文化創造都市がたった2つしかない。その中の一つである鶴岡が持つ世界的なネットワークをさらに活用すれば、鶴岡の国際化はさらに進展するだろう。コロナ禍が終息した今、人々との直接的な交流を促進する計画を策定することが重要。

・鶴岡には山形大学の留学生など一定数の外国人が存在しているが、日本人と外国人との交流機会はまだ不足していると感じる。現在年1回開催されているワールドバザールのようなイベントの頻度を増やす等、人々が出会い、交流する機会を増やすことが有益だと思う。それが大規模なものである必要はなく、そのような出会いの場が存在するだけでも、参加者同士がつながり、鶴岡の発展に寄与すると思う。

論点５．各分野におけるデジタル技術の活用について

・仕事がなければ移住は難しい。ただ、現在浸透しつつあるリモートワークに着目すると、鶴岡市が彼らの多拠点生活地域の一つの選択肢になり得る。必ずしも定住人口に繋がらないかも知れないが関係人口は増える。そのような施策も考慮に入れるべきだろう。

・チャットGPTなどが流行っている現状を考えると、「生成AIを活用して、鶴岡市の改革に向けて何ができるか」をテーマにコンテストを開催するのも面白いかも知れない。若者に興味を持ってもらえる可能性が高く、自治体による先行事例になり得れば国内外に向けたPRにもなり得る。また、実際に若者による生成AI活用のプロジェクトが開始されれば、それが何か新しいきっかけになる可能性があると思う。

・国の基本方向に整合を取りながら進めることは最低限として、鶴岡として何のためにデジタル化を進めるのかということを明確にして、目標を実現するためにこの施策を行うということを定義

すると良い。例えば若者の地元回帰を促進するために、定住人口や交流人口の増大、暮らし方・働き方の多様化への対応、産業で言えば色々な異分野との連携による新しい価値の創造など。
・誰一人取り残されないという観点では、行政サービスは申請したことに対してサービスをすることが多いが、デジタルを使って、個人の特性に合わせて、然るべきタイミングでサービスプッシュしてくれるような仕組みがあっても良い。
・鶴岡市には公共施設も含め、Wi-Fi が少ないので対策が必要。

その他・全体に関すること

・大人も子どもも、「これが鶴岡の推しなんだよ」とみんなが言えるようになりたいと思う。
・論点１（若者の地元回帰の促進について）と論点２（誰一人取り残さないための取組の推進について）に関して、学校教育との連携の部分があまり具体的に見られないので、どのように取り入れていく予定なのか見えると良い。外部機関との連携を小学校、中学校の教員だけでやるのは限界があるので、行政がある程度主導して連携の機会を設けた方が良いと思う。
・分野横断プロジェクトは、特別な体制で特別な権限と予算があって、特別なスキルを持ったメンバーがスピード感を持って取り組むイメージがあるが、各部署の担当の人が、月１回会議する位ではあまり進まない感じがする。例えば、市民や、周りから応援してくれるスキルを持った人材がそこに関わる進め方、体制があると良いと思う。
・未来創造のプロジェクト名を、より市民の関心を引くために、市民が自分ごとと感じるよう、少し柔らかく、かっこ良いネーミングにした方が良い。
・すでに主要な五つの施策を選定しているが､それらをさらに精査して絞り込むのも一考だと思う。リソースには限りがあるため、全てを網羅するのは現実的に難しい。インパクトやコストパフォーマンスを評価して、「これは絶対に実施すべき施策だ」と決めると、理解が深まり、実行に向けた推進力も増すと考える。

(2) デジタル田園都市国家構想総合戦略の策定について

・教育機関は、例えばグーグルフォームにアクセスしてはいけないなどの決まりがあり、デジタルに関して遅れている。デバイスを使えない先生もいる。子どもたちがこの時代にやっていけるのかと思うので、足並みを揃えられるようにぜひ行政が主導してほしい。
・デジタル・ディバイドに関して、高齢者でも家族が支えればデジタル・ディバイドにならない事例もあった。高齢者だからとか偏った目線ではなく、若者でもデジタル・ディバイドになる可能性もあるということも考えた上で支援の方法を考えてほしい。
・鶴岡の総合計画の良さは、キャッチフレーズにあるように「毎日、おいしい。ここで、暮らしたい。」というように、個人の視点が全面に出ているユニークなところだと思う。デジタル田園都市国家構想と言うと、非常に大きな視点から個人の行動を位置付けてしまうような書きぶりになるので、違和感を感じる。